

# “東日本大震災からの復興のための実践活動及び研究” 成果報告書

## 1. 実践活動・研究の名称

被災地間の対話に関する研究—生活支援相談員への支援とインターローカルな知見

## 2. 実践活動・研究の成果

### (1) グループ代表者

①氏名： 川野健治

②所属・職名：独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所  
自殺予防総合対策センター・室長

③構成メンバー（ 3 ）人

氏名：白神敬介

所属・職名：独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所  
自殺予防総合対策センター・研究員

氏名：末村祐子

所属・職名：大槌町参与（復興局）（当時）

氏名：大塚耕太郎

所属・職名：岩手県こころのケアセンター・副センター長／岩手医科大学神経精神  
科学講座・講師

### (2) 実践活動・研究の成果

成果：支援の側面

被災地の支援者支援では、健康調査やカウンセリング機会の提供など、リスク因子への緩衝を目的としたものが多い。本研究では、むしろ防御因子の強化、つまり支援者へのエンパワーメントとなる活動を計画した。すなわち、東日本大震災の被災地域への支援として、新潟県中越地震被災地で活動した支援者を岩手県釜石・大槌町地域に招いて現支援者との対話の機会を提供し、被災地の生活支援について自由に意見交換する機会とした。参加者は主体的な経験を通して、支援者としての経験の明確化、知識の共有や連携の意識などが得られると考えられた。

このプログラムは、2012年12月5日の午後に、大槌町役場の仮庁舎の一室で開催された。新潟からは、中越地震以降、新潟県にて生活支援相談員事業に関連した、LSA（生活支援相談員）や県行政職員、社会福祉協議会職員、研究者の4名、岩手県大槌町からは、LSAのほか、地域支援相談員、町社会福祉協議会、大槌町の保健師、被災者支援室の職員など、併せて40数名が参加した。構成メンバーのうち1名と被災者支援室の職員1名が、会の進行をつとめた。プログラムは大きく3つの部分で構成されていた。1) 新潟県旧山古志村の取り組みの紹介、2) 4つの班にわかれての小集団討議、コーヒーブレイクを挟んで、班員を入れ替えてもう一度小集団討議を行った。各班に司会と記録役を

つくり、討議の内容は終了後に全体で共有した。3)最後に、対話の内容を基にした、かるたづくりにとりくんだ。

かるたづくりは、支援者らが自らの経験を主体的に言葉として、可視化する試みであった。各自作成し、各グループから無記名投票で4つの優秀作品が選ばれた。

- ・声をあげなければ 何も動かない あげれば 動くこともある
- ・泣きたい時は 声を出して泣く 笑いたい時は もっと声を出して笑う
- ・何はともあれ 健康第一 妙案は、元気な私に おりてくる
- ・毎日 じたばた でも少しずつ前進 しています

これらの内容はプログラム内での小集団討議の内容を反映したものであり、同時に参加者からの賛同を集めたものとして、参加者の経験を代表する表現と考えられよう。いずれも句の中に現状の難しさ、つらさとそれを越えるための提案が含まれており、このプログラムが参加者に支持的であったことが推測される。

一方、簡単な事後アンケートも実施した。「テーマ」について、「たいへんよい」、および、「よい」と答えた人を合わせると、89%となった。同様に、「内容・構成」については86%、「会は楽しめたか」は90%であった。プログラムはおおむね肯定的に評価されていると考えられたが、「会では十分に話せたか」では、「とても話せた」と「話せた」を合わせても63%であり、この点では改善の余地があると考えられた。

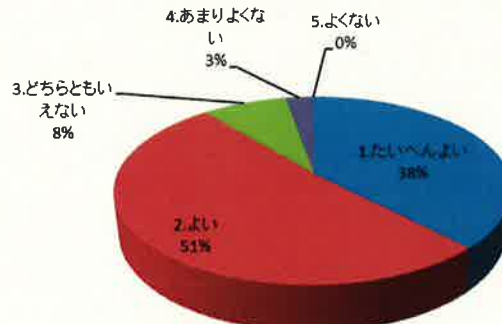
回答者数：37名

- 職種の内訳： 1.生活支援相談員 24名  
2.地域支援員 8名  
3.その他 5名

### <今回の催しについて>

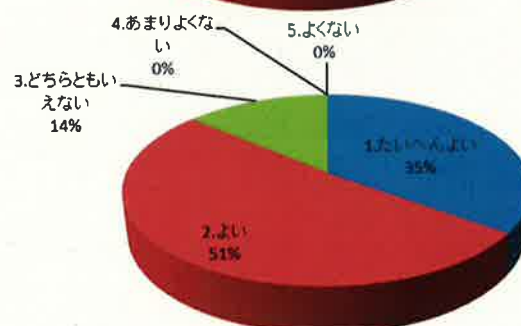
#### テーマについて

1.たいへんよい	14	38%
2.よい	19	51%
3.どちらともいえない	3	8%
4.あまりよくない	1	3%
5.よくない	0	0%



#### 内容・構成について

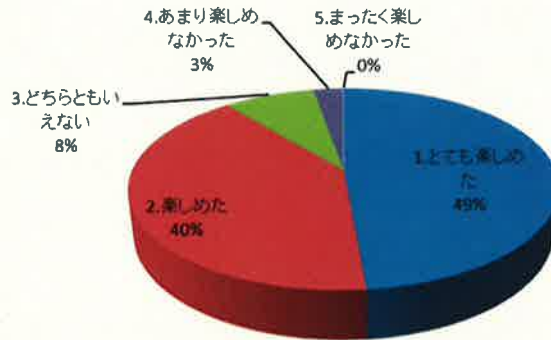
1.たいへんよい	13	35%
2.よい	19	51%
3.どちらともいえない	5	14%
4.あまりよくない	0	0%



5.よくない 0 0%

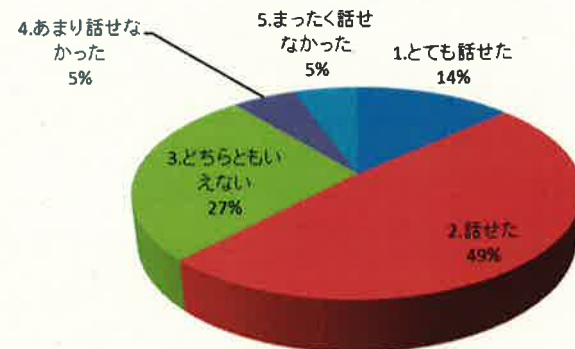
### 会は楽しめたか

1.とても楽しめた	18	49%
2.楽しめた	15	41%
3.どちらともいえない	3	8%
4.あまり楽しめなかった	1	3%
5.まったく楽しめなかった	0	0%



### 会では十分に話せたか

1.とても話せた	5	14%
2.話せた	18	49%
3.どちらともいえない	10	27%
4.あまり話せなかった	2	5%
5.まったく話せなかった	2	5%



また、以下にはアンケートの自由記述欄の内容を示す。大きく、認知的な学びの指摘とポジティブな感情が報告され、ここからも、プログラムが支持的であったと確認できた。

#### アンケートの自由記述

- ・ 社協の方と支援員の現場の方が話しをしたことは大きかったと思う。中越の話も共有出来たことも良かったと思います。
- ・ いろいろな職種の人と話せて、立場ごとに違う悩み、感じてることを知れて良かった。支援者同士で顔を合わせることは大事だと思った。
- ・ 参加者の皆さんと、色々な話しができ、これからの訪問が軽くなるような気がしました。
- ・ 諸条件が違っていても、長岡・山古志の経験談・問題点、で大いに参考になったこと、考えさせられることがあった。
- ・ もっと詳しく話しを聞きたい、もっと自分達の話しをしたかった想いがあった。
- ・ 以前、地域支援員配置事業の研修にて、お話しを伺うことがありました。今回の様なグループディスカッション形式の方が全員に何かを落とす事が出来たのかなあ…と思いました。
- ・ すばらしい企画だと思います。次回も開催される事を望みます。
- ・ とてもリラックスして参加できました。
- ・ これからももっと頑張れる気になりました。本当にありがとうございます。

#### 成果：学術的側面

LSA の日々の活動の中には、今後起こりうる被災の現場に向けて「受け渡し、引き継ぐべき経験」が含まれている可能性があるが、それは日常的に意識されるものではない。東日本大震災の支援者に

とって、かつて同じ LSA という名称の下の活動に従事し、おそらく具体的には異なる経験をもつ新潟中越地震時の LSA との対話は、協調とズレを含み得る「構造的ディスコミュニケーション」（山本・高木, 2011）であり、両者の生活支援についての相互説明・理解のプロセスは、より創発的で可能性に富むと期待される。その記録を作成することは、異なる時間と空間の被災地間でのインターローカリティ（矢守, 2009）を探索する試みであると考えられた。

本プログラムのうち、グループごとに実施された小集団討議の内容を IC レコーダで録音してテキストデータを作成し、対話によって知見が見出される様子を抽出した。以下のような 4 つの型が見出された。典型的なやり取りと併せて示す。

1) 相似：これは、相互によく似た経験をしていることに、共感を持って気づく過程である。

大槌 1：ある意味、制度が充実したせい、みんなの優しい義援の気持ちがあるせい、1年8か月経っても、「次は何かこないのかな」という人がやっぱり2〜3割いるんですよ。

大槌 2：うん、いますよね。うんうんうん。「次、いつお金入るの?」とか言われます（笑）。

新潟 1：お金ね（笑）。お金はあれですけど、物資に関しては8年経っても山古志、そうですよ。

大槌 1：そうですよね。

新潟 1：うん。「何かくれるんじゃないか」と。何かコンサートとか、何か、「招待じゃないか」と。

2) 反照：これは、中越地震の経験を阪神淡路大震災と比較して説明されるなかで、中越と大槌の違いを見出すやりとりである。違いを見出すことが必ずしも否定的にはならず、相互的に位置づけることができるやりとりとなっている。

大槌 3：同じ仮設に全部入ったという・・・

新潟 2：そうなんです。そうなんです。中越の時と今回、決定的に違うっていうのはそこなんです。中越の時って、山古志も長岡もどこでもそうなんですけど、徹底して地域主義っていうのを貫いたんですよ。誰が何と言っても。要は、ここの地域で被災した人は、ここの仮設を構成するというようなパターン。要は、阪神の時は仮設ができた時に、（中略）高齢者とか障害者とかそういう弱者を優先的にほぼ入れたので、まわりに誰も知らない人が入る形というのがあったので、

大槌 4：まさしく同じ大槌のこと・・・

大槌 5：まさしく大槌だね（笑）

3) 測定：このプログラムの小集団討議においては、中越の復興過程を年表として作成し、各自に資料として配布していた。それを「ものさし」として相互の時間的前後関係を見出す対話が見られた。

新潟 2：神戸、5年強くらいかかっているのかな。あれ、7年で、平成12年の3月だったっけ？ うちも3年ぐらいかかっているんですよ。

大槌 1：でも、仮設住宅ができて、3年でもう仮設住宅はなくなったんですか？

新潟 2：なくなったんですね、うちは。

大槌 1 : すごいですね。すごいですね。

大槌 2 : 計画的だったんですね(笑)

大槌 3 : だから、うちらここで、逆算していくと、ここらうろろしているよねっていう感じで

大槌 4 : まだまだですよ、全然

4) 外化 : 大槌の状況を外部 (中越の LSA) に説明することで、同席している大槌の他職種の理解が進む過程。暗黙の「共有」認識が崩れて、相互理解が進むプロセスが可視化される。

新潟 1 : 僕が答えきれなかったところを、多分、今、答えていただいたのですが・・・。

LSA 1 : そういったケースは(中略) 保健師につなげて、私たちもちょっと訪問は見合わせますので、支援員さんの人たちはね、声掛け、●けれども、ちょっと注意しながらとか。そういった声掛けとかもしながらやっています

新潟 1 : どうですか。何かありますか？

支援員 1 : アルコールというか、そういう人とか避けているような感じの時は社協の方に相談して、そちらで対応していただく感じなんですけど、そこにまたおつなぎするっていう感じなので、「そういうふうに進んでいるのか。なるほど」と思ったんですけども。

全員 : (笑)

一方、「質問と回答」あるいは「提案」といった形式での対話が共有を生みにくくなっている様子も観察された。つまり、一方向的な情報提供は、「うちはまだ、このような状況だから」「大槌にうまく合うかどうかわかりませんが」といったエクスキューズとともに語られ、共感をもった共有に至らない場合があった。

以上のように、この「支援者懇談会」形式のプログラムは、支援者の相互交流を促し、経験を可視化し、対話をもとに能動的に知見を見出す点で、支援者支援として有効であると考えられた。これまで被災地では支援者に向けて多くの「研修」が行われたが、大規模災害時において、支援者をエンパワメントするプログラムの実行可能性と有効性を、本研究で示すことができた。

学会発表

○川野健治・白神敬介 2013 被災地間の対話－生活支援相談員とインターローカルな知見 日本心理学会.

## “東日本大震災からの復興のための実践活動及び研究” 会計報告書

活動・研究名称	被災地間の対話に関する研究—生活支援相談員への支援とインターローカルな知見	
代表者 氏名・所属	川野	健治

1. 助成額	¥600,000
2. 支出合計	¥600,000
(1) 機器・備品	
1)	
2)	
3)	
(2) 消耗品	
1) ICレコーダー・・・①	¥15,960
2) トナーカートリッジ・USBメモリ他・・・②	¥84,485
3)	
(3) 旅費・交通費	
1) 川上秀樹 (1215 新潟より参加)・・・③	¥58,603
2) 本間和也 (1215 新潟より参加)・・・④	¥41,895
3) 井上洋 (1215 新潟より参加)・・・⑤	¥41,895
4) 川野健治 (1115 白神氏交通費を含む)・・・⑥	¥111,080
(4) 謝金	
1)	
2)	
3)	
(5) その他	
1) テープ起こし (東京反訳)・・・⑦	¥75,270
2) テープ起こし (東京反訳)・・・⑧	¥70,800
3) テープ起こし (東京反訳)・・・⑨	¥89,100
4) 会議費・・・⑩	¥8,077
5) 振り込み手数料・・・⑪	¥2,835

※ 領収書は各費目ごとにA4用紙に貼付し、通し番号を付けてください。